

Note on visits to Japanese companies operating in Taiwan, March 2015

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/44902

台湾における日系企業等への訪問記録

— 2015年3月 —

弁 納 才 一
古 泉 達 矢

はじめに

筆者の1人である弁納は、2012年3月、金沢大学国際学類の学生8人を引率して中国上海市及び江蘇省無錫市・南京市などにある日系企業などを訪問した¹⁾。そして、2014年3月にも同様の企業などへの訪問を計画・準備していたが、日中関係が急速に悪化したことと大気汚染が深刻化しているために健康被害が懸念されることなどを総合的に勘案し、訪中を断念することにした。そこで、2014年3月、弁納と古泉は、中国大陸に代わる新たな研修先を開拓するために、台湾・シンガポール・マレーシアの日系企業・大学・博物館などを参観し²⁾、安全性と利便性の面から、台湾における企業・大学・研究機関などの研修が最適であると判断した。

こうして、2015年2月28日(土)～3月10日(火)の約10日間、弁納と古泉は金沢大学国際学類の学生10人³⁾を連れて台湾を訪問したが、その旅程は、以下のとおりである。

2月28日(土)、小松空港を出発し(19:30、エバー航空BR157便)、台湾時間22:00(日本時間23:00)に桃園空港に着陸し、高速バスにて台北駅前に行った(1人120圓)。宿泊したホテルは、YMCA台北である。

3月1日(日)、2・28平和公園・2・28紀念館と故宮博物院を参観した。

2日(月)、兆豊銀行で両替をした後、中正記念堂と国父記念館を参観した。

3日(火)、午前はJTB台湾を訪問し、午後は九份を参観した。

4日(水)、中央研究院を訪問した。

5日(木)、午前は国史館を参観し、午後は烏来・台湾大学・台湾師範大学を訪問した。

6日(金)、午前は台湾政治大学を訪問し、午後は猫空を参観した。

7日(土)、日本植民地時代に鉱山開発が進められた平溪を参観した。

8日(日)、北投(温泉博物館など)と淡水(旧イギリス領事館など)を参観した。

9日(月)、午前はSONY台湾を訪問し、午後は日勝生加賀屋旅館を訪問した。

10日(火)、桃園空港を14:45に出発し(エバー航空BR158便)、18:30に小松空港に着陸し、無事に帰国した。

以下、本稿では、その概略を記録し、今後の海外研修の参考に資することにした。

I 企業など

今回、海外で働くということに関連して、台湾における日系企業などの方々共通して語っていたことは、派遣された国ないし地域の歴史や文化を十分に理解することが非常に重要であるという点だった。すなわち、海外における企業の経済活動にとって、最先端の技術や世界標準(いわゆるグローバル・スタンダードや世界共通語としての英語など)よりも地域の特性(ローカリズムとりわけ各地域の歴史や文化)を理解しようとする姿勢を持つことが極めて重要であるということである。

(1) JTB

3月3日(火)、8:30にホテルを出発し、台北車站から地下鉄に乗車し、一度乗り換えて松江南京站で下車し、9:00前にはJTBの前に到着したので、近くの喫茶店で待機し、9:25頃にJTBの店舗に入った。こうして、9:30~11:00、JTBを訪問してお話を聞かせていただいた(JTBとの事前の連絡担当者は伊藤萌梨と川上成美)。

まず、台湾人スタッフの責任者に簡単に同店舗に関する説明をしていただいた後、隣接するSET東南旅行社ビル(写真1-1を参照)10階の会議室へ案

写真1-1. 東南旅行社(SET)



写真1-2. JTB TAIWAN



内していただいた。SETとは、South East Travelの略称であろうか。

董事長の林田充氏(前任地は静岡県で、金沢市武蔵が辻にある店舗でも勤務したことがあったという)には、最初に資料「日台交流人口の推移」を席上配布の上で、台湾人の訪日旅行者数と日本人の訪台旅行者数の推移及び今後の戦略・目標などを説明していただいた。すなわち、訪日台湾客数の年間取り扱い高を2014年現在の1万1,000人程度から2020年には23万人にまで増加させることを目指しているという。この計画は、台湾で同地の業界紙にも詳しく取り上げられたとのことである。さらに、林田氏には台湾の人々が非常に親日的であることや、その理由と考えられる台湾をめぐる近現代史について熱く語っていただいた。

また、林田氏は、日台交流に業務の枠を超えた使命感を感じており、戦前の台湾をよく知る世代が逝去する前に、一人でも多くの日本人に台湾、とりわけ本省人の多い台湾中部・南部(台中・台南)を訪問し、同地の歴史を肌で学んで欲しいと熱望されていた。そして、最後に、数人の学生から質問が出され、林田氏に回答していただいた。参加した学生たちは林田氏の熱意に大いに感銘を受けたようだった。

予定していた時間(11:00)を少し超過していたこともあって、ややあわただしく同会議室から出てきたために、同ビルを出た後になってから、JTBの会議室で林田氏とともに集合写真を撮るのを忘れていたことに気づき、われわ

れ教員2名と学生たちだけでJTBの店舗前で集合写真を撮ることになってしまった(写真1-2を参照)。

なお、JTB台湾への訪問には2014年9月より1年間の予定で台湾師範大学に留学している西田万莉も参加した。

(2) SONY台湾

3月9日(月)、8:30にホテルを出発し、台北車站から地下鉄に乗りし、9:00頃にはSONYが入っているビルの前に到着した(9:30からの訪問を予約していた)ので、近くにあったモスバーガーにて待機し、9:25頃に同ビルに入ると、同ビル1階のロビーには、すでに同社の野上靖博氏が出迎えてくださっており、すぐに同ビル8階の会議室に通されると、台湾人スタッフ(女性の周さん?)が我々を迎えてくれた(SONY台湾との事前の連絡担当者は浅井祐樹と門野真郎)。

実は、事前に、SONY側から11:00前には完全に終了してほしいとの連絡を受けていたので、10:30頃には退去するつもりでいた。こうして、同社の会議室において、9:30~10:45、董事長の荒牧直樹氏にパワーポイントを利用しながら、SONYの活動の概要や、台湾におけるAV機器・情報端末市場などの状況を説明していただいた後、質疑応答に入った。同社の活動は台湾への販売よりも、台湾企業への発注の方がはるかに多く、また、台湾におけるAV機器・スマホ・デジカメ等の市場では、SONYは現時点で首位を占めているとのことだった。こうした点は、韓国勢が首位を占める他国とは大きく異なる点であり、台湾に住む人々からいかに同社の製品が高く評価されているかの証左であるとも言えよう。

なお、今回、グローバルとローカルについてお話ししていただいた点がとりわけ印象的だった。

最後に、数人の学生から質問が出され、荒牧氏に回答していただき、10:45頃に終了し、集合写真を撮った(写真2を参照)。

(3) 日勝生加賀屋

3月9日(月)15:00~17:00、日勝生加賀屋を訪問した(日勝生加賀屋との事前の連絡担当者は和田友美)。

写真2. SONYビル会議室



予約していた15:00より約10分前に訪問したところ、接客係のトップと思われる方に旅館の中を案内していただいた(写真3-1を参照)。まず最初に案内された2階のフロントの側にはレンタルの女性用の浴衣が置かれていた。学生たちは、壁に蒔絵が嵌め込まれているなど、館内の内装や設備(エレベーターに至るまで)の豪華さに一様に圧倒されたようだった。その後、宴会場(写真3-2を参照)のうちの1室に案内され、ミネラルウォーターとお茶をいただきながら、董事長の徳光重人氏を待つことになった。徳光氏は、多忙の故、予定していた時間よりやや遅れてやってきた上に、徳光氏の携帯電話は頻繁に呼び出し音が鳴っていた。

徳光氏による説明は、パワーポイントを利用しながら、御本人が台湾で仕事をする(台湾で加賀屋を出店する)ようになるまでの経緯や学生にとって仕事をする上で何が大切であるかなど、多岐にわたり、同氏の人生観も交えながら、熱く語っていただいた。

今回は、予定していた時間(16:30)を超過して、徳光氏の生き方について聞くことができた。そのため、質問する時間はほとんどとることができな

写真3-1. フロント(2階)



写真3-2. 宴会場



かったが、学生たちは金沢大学のOBである徳光氏の生きざまの一端に直接触れることができたいに刺激を受けたようである。そして、最後に、日勝生加賀屋の屋外で徳光氏といっしょに集合写真を撮っていただいた(写真3-3を参照)。

なお、2015年3月の帰国後、徳光氏から本学の学生の和田友美を通して日勝生加賀屋へ訪問した時に使用されたパワーポイントの資料を送付していただいた。

写真3-3. 日勝生加賀屋



II 大学・資料館など

(1) 故宮博物院

3月1日(日), 13:30にホテルを出発し, 地下鉄とバスを乗り継いで, 故宮博物院を参観した(展示物は, 質と量の両面において北京の故宮博物館を圧倒している)。入場料は, 一般が250円で, 学生割引があり, 国際学生証(日本の大学の学生証は不可)を所持していた浅井祐樹は学生料金となった。

同館内は中国大陸からやって来たと思われる中国人観光客でごった返しており, かつて参観した時に感じた静寂さは完全に失われていた。また, 特に有名な展示物(とりわけ, 白菜や東坡肉の工芸品)がある展示室では, 非常に込み合っていたために, 立ち止まってじっくりと鑑賞することはできなかった。ちなみに, 弁納と古泉はこれまでも何度か参観している。

(2) 中央研究院

3月4日(水), 地下鉄の南港展覽館站で下車し, さらに, バスに乗り換え, 中央研究院(写真4-1を参照)を訪問した。

写真4-1. 中央研究院

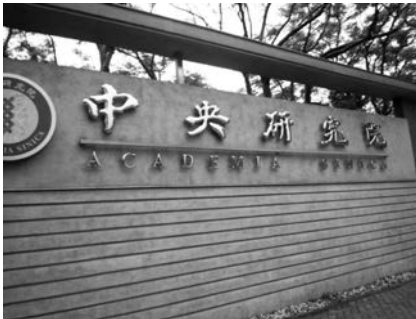


写真4-2. 郭廷以圖書館



2015年3月現在、中央研究院人文社会研究所には早稲田大学大学院生の鶴園裕基氏(金沢大学国際学類教授の鶴園裕先生の御子息)が研究のために滞在しているので、中央研究院学术交流中心のロビーで待ち合わせて、中央研究院の近くのレストランで昼食をいっしょに摂った。鶴園裕基氏が食事中に何気なく話していたことに対して、学生たちは興味深く耳を傾けていた。

そして、昼食後、中央研究院内の近代史研究所檔案館・郭廷以図書館(写真4-2を参照)・人文社会連合図書館(国内外の研究雑誌が充実していた)を案内していただいた。

なお、近代史研究所檔案館では、学生たちがアーキビストのご好意で檔案資料の検索・閲覧を経験する機会を得ることができ、一方、古泉と弁納はオンラインで資料を閲覧するために必要となるアカウントの作成手続きを行った。また、人文社会連合図書館は雑誌の所蔵が充実しており、日本語の雑誌も多数所蔵していた。

16:30頃、中央研究院学术交流中心のすぐ側にある人文社会連合図書館から出てきたところで鶴園裕基氏と別れ、学术交流中心の地下1階にある書店で書籍を購入した後、ホテルに戻った。

(3) 国史館

3月5日(木)、10:00にホテルを出発し、地下鉄の新店站で下車し、バスに乗り換えて、中華民国時代の檔案資料などを所蔵している国史館を参観した(写真5を参照)。

本来、同館内で文献資料の検索を行う予定だったが(入館するためには受付でパスポートを提示する必要がある)、何人かの学生がパスポートを所持していなかった(スリにあうことを警戒してホテルに置いてきた)ために、入館手続きをすることができなかった。なお、同館の守衛の話によれば、台北車站から徒歩圏内のところに国史館別館があり、国史館が所蔵する文献資料を検索することができるという。

写真5. 国史館



(4) 国立台湾大学

3月5日(木)午後、烏来を参観して台北市内に戻ってきた後に、今回の研修に参加していた山崎祥子が2012年9月から1年間留学していた国立台湾大学を参観した(写真6-1・写真6-2を参照)。最寄りの地下鉄の駅は松山新店線公館站である。国立台湾大学は次に訪問することになっていた国立台湾師範大学に近い。そのため、当初、徒歩で移動しようとしたが、結局、バスで移動した。

写真6-1. 国立台湾大学正門



写真6-2. 国立台湾大学図書館



(5) 国立台湾師範大学

3月5日(木)夕方、今回の研修に参加していた浅井祐樹が2013年9月から1年間留学していた国立台湾師範大学を訪問した。最寄りの地下鉄の駅は松山新店線古亭站である。現在、同大学には金沢大学国際学類アジアコース3年生の西田万莉が留学しているので、事前に連絡を取って台湾人学生との交流の場を設定してもらえるように依頼していた。

18:00頃から同大学のラウンジで西田万莉が連れてきた台湾人学生6人との間で自己紹介をするなどして簡単な交流を行った(写真7を参照)。その後、同大学を出て東門站近くのレストラン(餃子店)で会食した。

写真7. 国立台湾師範大学ラウンジ



(6) 国立政治大学

3月6日(金)、国立政治大学総合院館5階の国際会議場(写真8-1・写真8-2を参照)において講演をすることになっていた歴史言語文化学系・国際学類のABE DAVID KIYOSHI先生及び法学系・法学類の羽賀由利子先生・山本竜大先生とともに、7:30にホテルを出発し、地下鉄の文湖線動物園站で下車し、バスに乗り換えて、8:30頃には同大学に到着した。

写真8-1. 国立政治大学正門



写真8-2. 国立政治大学総合院館



国立政治大学におけるシンポジウムの開会は9:00を予定していたが、実際には9:30近くになってようやく開幕した。まず国立政治大学側が挨拶の言葉を述べたのに続いて、急遽、今回の台湾訪問者の中で最年長者である弁納が金沢大学側を代表して挨拶の言葉を述べることになり、国立政治大学と金沢大学との学術交流の調印式に臨んだ。

その後、20分間ほどのティー・ブレイク(飲み物などが用意されていた)を挟んで、「全球治理与民主発展：台湾与日本的經驗比較」(写真8-3を参照)をテーマとして、羽賀由利子先生(Arbitration and Moral Rights)、ABE DAVID KIYOSHI先生(The Japanese Nisei of the Kona Coffee Farmers:Shinto Shrines Left Destroyed and Hidden National Identities)、山本竜大先生(New Political Campaign and Newspaper in Japan: Case Study of Internet Campaign)、游清鑫氏(政治大学選挙研究中心特聘研究員、Taiwan's Electoral Politics: Good, Bad, and Ugly)、範世平氏(台湾師範大学政治学研究所教授、台湾民主对兩岸關係發展的推動与制約)、陳欽春氏(銘伝大学公共行政学系助理教授、治理的發展趨勢与時代意涵)による研究報告と質疑応答が行われた。

そして、昼休みには、国立政治大学側から我々教員と今回研修に参加した

学生に弁当が提供され、学生たちには国立政治大学の学生と交流する機会が与えられた。昼食後、金沢大学の学生と国立政治大学の学生が記念撮影をして散会となった。

写真8-3. シンポジウム「全球治理与民主発展：台湾与日本的經驗比較」



(7) 真理大学

3月8日(日)、アロー戦争(第二次アヘン戦争)後の北京条約によって、1864年に開港地の1つとなった淡水を訪問する途中で、馬偕街(Mackay St., 写真9-1を参照)を通して、真理大学を参観した(写真9-2を参照)。なお、同大学の起源はカナダ人宣教師マッケイ(Mackay, 馬偕)が1882年に開校した牛津学堂(オックスフォード・スクール)に遡る。

写真9-1. 馬借街(Mackay St.)



写真9-2. 真理大学(Aletheia University)



Ⅲ その他

(1) 2・28和平公園

3月1日(日), 前日のホテルへのチェックインが深夜となったので, ややゆっくりと起床し, 10:00にホテルを出発することにした。ホテルから徒歩で2・28和平公園へ向かった。その途中で, 国立台湾博物館の前を通ったが, 展示内容から考えると, 入館料がやや高かったので, 入館するのを断念した

(写真10-1を参照)。

写真10-1. 国立台湾博物館



写真10-2. 2・28記念館の石碑

同園内は草木が多く、様々な鳥が飛び交い、リスが多く生息していた。そんな中を、台北市民は散歩したり、集団で太極拳をしたり、あるいは、合唱をしたりして楽しんでいた。そして、我々は同公園を散策した後、同公園内にある2・28事件の史料・資料などを展示している2・28記念館(写真



10-2を参照)を参観した。同日は、前日(2月28日)に2・28事件の記念式典が開催されていたためであろうか、入館料が無料だった。

(2) 西門

3月1日(日)夕方、故宮博物院を参観した後、地下鉄に乗りして西門站で下車し、西門站周辺の西門町(日本植民地時代に日本人が多く居住していた地

域で、いわゆる日本人街のようなところ)を散策し、夕食をとった。台湾師範大学に留学していた浅井祐樹によれば、西門站周辺は、多くの若者が集まってくるという意味で日本の原宿のようなところだという。西門町は、歩行者天国となっており、多くの若者が集まってきた。

一方、西門町の向かい側に西門紅樓(写真11-1を参照)があり、建物の中には日本植民地時代の写真などが展示されていた。なお、同建物の入り口にある説明によれば、西門紅樓は、もともと1908年に日本植民地時代最初の木造市場として建てられたが、後に、台湾総督府營繕課の近藤十郎の設計によって赤レンガ造りの洋風建築物に改築されたという。

(3) 中正記念堂

3月2日(月)午後、建物内の中央に蒋介石像がある中正記念堂を参観した(写真12-1を参照)。同記念堂内では様々な歴史的展示を参観することができる(入館料は無料)。

写真11-1. 西門紅樓



なお、中正とは蒋介石のことである。また、同記念堂内では、一定の時間内に衛兵の交替が行われているが、その衛兵の交替式とそのための行進を間近で見ることができる(写真12-2を参照)。

写真12-1. 中正記念堂



写真12-2. 中正記念堂内の衛兵の行進



(4) 国父記念館

3月2日(月)午後、中正記念堂を参観した後、地下鉄にて移動し、国父記念館を参観した(写真13-1を参照)。同記念館内では、中華民国時期にかかわる様々な展示を参観することができる(入館料は無料)。同館内でも、中正記念堂と同様に、一定の時間内に衛兵の交替式とそのための行進を見ることができる。なお、国父とは孫文(孫中山)のことである。

(5) 九份

3月3日(火)午後、地下鉄の忠孝新興站で下車し、九份行きのバスを待っていたが、バスがなかなか来なかったので、タクシー2台に分乗し(1人当たり往復300圓)、日本植民地時代に鉱山(炭鉱と金鉱)開発が進められた九份を参観した(写真14-1を参照)。現在は、観光地として有名で、学生たちの話しによれば、九份には宮崎駿監督の映画『千と千尋の神隠し』の一場面に似た風景があるのだという。そのためであろうか、日本人観光客も非常に多かった。

写真13-1. 国父記念館



山のほぼ頂上に建つ九份国民小学(写真14-2を参照)は、鉱山地区の教育機関としては最も早い明治42(1909)年に設立されたもので、鉱山労働者の子弟に教育の機会を与えたという説明が見える(写真14-3を参照)。

写真14-1. 九份旧道



写真14-2. 九份国民小学



写真14-3. 九份国民小学の説明



(6) 烏来

3月5日(木)午後、泰雅(タイヤル)族の居住地である烏来を参観した(写真15-1・写真15-2を参照)。途中で車両の側面にイノシシの絵がプリントされたトロッコ電車(写真15-3を参照)に乗ってさらに山奥へ入って行くと、タイヤル族の女性が経営する土産物屋があり、民俗衣装を身に着けた女性の店員といっしょに記念撮影をした(写真15-4を参照)。

そして、烏来のバスターミナルの近くに烏来泰雅民族博物館があり、無料開放されていた(写真15-5を参照)。

写真15-1. 烏来バスターミナル付近の石碑



写真15-2. 烏来を流れる川



写真15-3. トロッコ電車



写真15-4. 「酋長文化村」



写真15-5. 烏来泰雅民族博物館



(7) 猫空

3月6日(金)午後、国立政治大学からバスにて地下鉄文湖線の終点である新店站(国立政治大学の最寄駅)に戻り、かつて台湾師範大学に留学していた浅井祐樹の勧めに従って、男子学生を中心として(女子学生はホテルに戻って休憩)、新店站近くからゴンドラ(「纜車」、総運行距離は4km余りにも及ぶ)に乗って「猫空」(この地名の由来の1つとして、猫が1匹もいなくて空になっていたことからという説があるが、ゴンドラの中から地上に猫がいるのを見つけた)を参観した(写真16-1・写真16-2を参照)。ゴンドラは2種類あり、我々は車体の下部(床)がガラス張りになっているものに乗った。途中の住宅街の屋根が全て赤色で統一されているところがあった。住宅地の景観を

意識しているのであろうか。

猫空は、ガイドブックにも特に見るべきものが取り上げられていないためか、日本人を含む観光客の姿をほとんど見ることはなかったが、静寂さと自然(深緑)を満喫することができる。

写真16-1. ゴンドラ乗り場



写真16-2. ゴンドラからの眺め



(8) 平溪

3月7日(土)、地下鉄文湖線の木柵駅で下車し、バスに乗車して1時間ほどかけて平溪を訪問した。当該地は、日本植民地時代に炭鉱開発が進められ、石炭を運送するために平溪線鉄道が敷設されたが、現在は観光地として有名な場所になっている。今回は、かつて台湾大学に留学していた山崎祥子の強い勧めに従って参観することになった。

バスは、十分瀑布公園入口前に到着した。まず十分瀑布(滝)を見学した後(写真17-1・写真17-2を参照)、古い街並みが残る商店街の平溪老街から十分老街(写真17-3を参照)へ徒歩で移動し、食事をした。その一帯は、いわゆる観光客でごったがえしていた。そして、平溪老街では当地の風習に従って学生とともに各自の願いを書いたランタン(天燈)を天空に挙げた。今年(2015年)の春節(2月19日)から数えて15日目の3月5日(木)が元宵節だったが、その日は平溪では天燈節が盛大に祝われたようである。

なお、帰りは十分車站(写真17-4を参照)から電車に乗って瑞芳駅で台北行き電車の乗り換えをした。同車内は観光客で超満員となっていた。

写真17-1. 十分瀑布公園



写真17-2. 十分瀑布



写真17-3. 十分老街



写真17-4. 十分車站



(9) 北投

3月8日(日)、台湾における主要な温泉がある新北投には、現在、北投温泉博物館(かつての第二公共温泉。入館料は無料。写真18-1を参照)があった。翌9日(月)、日勝生加賀屋を訪問する前に、そのすぐ隣に温泉があったのに気付いた。「入浴請著泳装」の注意書きの下に「水着でご入浴お願いします!」という日本語が見える(写真18-2を参照)。

また、日勝生加賀屋の斜め向かいにある台北市立図書館北投分館にも立ち寄った(写真18-3を参照)。

写真18-1. 北投温泉博物館



写真18-2. 温泉



写真18-3. 台北市立図書館北投分館



(10) 淡水

3月8日(日), 地下鉄淡水線の終点駅の淡水站で下車し, 淡水の老人街を歩いていき, 昼食に1個35圓の「阿給」(油揚げの中に春雨を入れて甘辛く煮たもの。写真19-1を参照)を食べた。この店の前にはテイクアウトする客が列をなしていた。

食べ終わった後, 小白宮(旧淡水関税務司官邸, 写真19-2を参照)や紅毛城(旧イギリス領事館。室内には領事自らがスケッチしたものも含めて, 多くの絵画が壁に掛けられていた。写真19-3を参照)を参観した。その後, 淡水

海関碼頭(写真19-4を参照)があった海沿いの通りを歩いて淡水線の淡水駅に戻った。

なお、アロー戦争(第二次アヘン戦争, 1856~60年)終結後の1960年に英仏両国と清朝政府との間で締結された北京条約により, 新たに開港された11港の1つに淡水が含まれていた。ちなみに, 1864~1971年, 淡水(紅毛城)にはイギリス領事が駐在していた。

また, 今回, 山本竜大先生たちが連携を模索するために訪問した淡江大学は淡水にある。

写真19-1. 「阿給」を売る店



写真19-2. 小白宮(旧淡水関稅務司官邸)



写真19-3. 紅毛城(旧イギリス領事館)



写真19-4. 淡水海関碼頭



(1) 士林

3月9日(月)午後、加賀屋旅館を訪問した後、地下鉄に乗って士林駅の隣の劍潭站で下車し、台北市内で最も有名な夜市 (Night Market) である士林夜市を参観し、夕食をとった(写真20-1を参照)。

写真20-1. 「士林市場(夜市)」



おわりに

台湾の地下鉄の車内アナウンスでは、中国語(普通語、北京官話であって北京語ではない)・英語・台湾語(閩南語、福建省南部の方言)・客家語が流されている。この点からも、台湾では、多文化共生が目指す努力がなされていることがわかる。

小松(金沢)・桃園(台北)便は、往復ともに、前回(2014年3月)と同様に、満席だった。そして、前回のフライトは小松・桃園の離着陸が1時間以上も遅れたが、今回のフライトは往復ともに定刻どおりの離着陸となった。

3月8日(日)、2011年3月11日に発生した東日本大震災に対して台湾から多額の義捐金が寄せられたことに対する感謝の気持ちを表すイベントが淡水で

開催されていた(3月11日に最も近い日曜日に開催されるという)。このイベントは、台湾に留学している日本人の学生が中心になって毎年開催されているという。ちなみに、今回の研修に参加した山崎祥子も台湾大学留学中にこのイベントに参加したという。

台湾の多くの人が親日的であることはよく知られていることだが、台北市内のホテルやレストランなどでは、学生がたどたどしい中国語で話していると、常に日本語で応対してくれたので、異文化コミュニケーションという点からすると、やや物足りなさを感じるようになった。

また、中国大陆と台湾では、簡体字か繁体字かという差異以外にも、中国語の単語や漢字表記にやや差異が見られ、逆に、台湾では日本語の漢字表記と共通する単語も多い。

いずれにせよ、今回の研修は、わずか10日間にすぎなかったが、単に企業や大学などへの訪問にとどまらず、台湾の歴史や文化・風習・自然などにも幅広く触れることができたことは、参加した学生にとって非常に有意義だったと思われる。

台湾を訪問する前に、学生たちに対して訪問先の企業などに関する下調べとあらゆる場面における実践的な中国語会話の練習を行わせたが、次回からは、これに加えて、台湾の歴史・地理・文化などについても幅広く事前学習をさせておく必要があると感じた。

最後に、無事に台湾での研修を終えて、御多忙中にもかかわらず、学生の訪問を快く受け入れていただいた企業などの皆様及び事前にいろいろとサポートしていただいた金沢大学の職員の皆様に対して心より御礼を申し上げます。

注

- 1) 弁納才一「中国華東地域における日系企業への再訪記録－2012年3月」(『金沢大学経済論集』第33巻第1号, 2012年12月)を参照されたい。なお、それに先立って訪問した際の記録として、弁納才一「華東地域における日系企業の現況について－2009年9月」(『金沢大学経済論集』第30巻第1号, 2009年12月)、弁納才一・周如軍「中国華東地域訪問記録－2010年2月・3月」(『金沢大学経済論集』第31巻第1号, 2010年12

月)がある。

- 2) 弁納才一・古泉達矢「東南アジア・台湾における日系企業等への訪問記録－2014年3月」(『金沢大学経済論集』第35巻第1号, 2015年1月)を参照されたい。
- 3) 参加した学生は, 和田友美(2年生, アジアコース)・門野真郎(3年生, アジアコース)・川崎亮平(3年生, 米英コース)・伊藤萌梨(4年生, 米英コース)・川上成美(4年生, 日本・日本語教育コース)・浅井祐樹(4年生, アジアコース)・中村優子(4年生・卒業見込み, アジアコース)・松倉翔太(4年生・卒業見込み, アジアコース)・山崎祥子(4年生・卒業見込み, アジアコース)・吉本真子(4年生・卒業見込み, アジアコース)の10名である。このうち, 山崎祥子と浅井祐樹は, それぞれ台湾大学(2012年9月から)と台湾師範大学(2013年9月から)に1年間留学していた。また, 和田友美・川崎亮平・浅井祐樹・吉本真子・中村優子・山崎祥子の6人は, 成績優秀(成績係数2.3以上)により, 日本学生支援機構(JASSO)から1人当たり6万円の奨学金を得ている。